

教職大学院 Newsletter No. 146

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2021.5.10(公開版)

教職大学院 Newsletter の背景と意味について: 新しい年の Newsletter に寄せて

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科 研究科長 柳澤 昌一

新しい年度の newsletter の出発にあたって、連合教職大学院における newsletter の意味について、改めて考えてみたいと思います。

通常、newsletter といえば組織の取り組みを広く効果的に伝えるために年数回程度刊行される広報誌、あるいは会員相互の連絡事項を共有するための簡便な通信というイメージが通常だと思います。連合教職大学院の Newsletter はそうしたイメージとはかけ離れています。そこではそれぞれのメンバーの実践の展開・試行錯誤、そこでの実感、そしてそれを著そうとしてとらえ返された省察がストーリーとして具体的に語られています。その多様なストーリーを読み進めること、読み重ねることを通して、私たちは長い実践と探究の歩み、そして実践を省察的にとらえ返し展望していく思考と表現の在り方を学んでいくことになります。長期実践研究報告・ラウンドテーブル、そして合同カンファレンスとともに、Newsletter もまた、私たちの協働探究とその文化を支える重要な柱となっています。Newsletter の新しいサイクルにあたって、なぜこうした通信を編んできたのか、編み続けているのか、改めてふり返りたいと思います。

『教職大学院 Newsletter』は、教職大学院出発の年、2008 年 4 月に出発しました。1 号(註 1)の段階

では、実はまだ有志による編集で教職大学院の公式のものではありませんでした。教職大学院の組織がまだ安定していないこの時期に、継続的な Newsletter の編集・発行の提案については当然慎重な意見が多くなることが予想され、とりあえずその意味を理解してもらうためにもまずはどのようなものか作ってみて判断してもらおうということでした。

Newsletter の基本的な考え方は、分散的に展開している協働探究のコミュニティを結び、互いの探究とその省察を共有し、また記録として積み重ね、またより広く公開していくための媒体であるということになります。協働の探究と省察の共有としての Newsletter は、実は教職大学院に先立つ、福井大学教育学部のいくつかの取り組みの中ですでに重要な編成として取り組まれていました。学習過程研究という協働のゼミでは、毎週それぞれのグループでの

内容

- 巻頭言 (1)
- スタッフ自己紹介 (2)
- 院生自己紹介 (6)
- 令和 2 年度運営協議会報告 (18)
- 開校式 (20)
- スケジュール (21)

探究を記録化し共有するニュースを編集していました。並行して進めていたコミュニケーション研究というゼミでも同様のニュースを編集していました。自分たちの試行錯誤を含めた探究過程を、他のグループのメンバーにも共有出来るようにとらえ直し、文章に著すことは、実は人に伝えること以上に、自分自身の探究のプロセスを問い直しその意味を問い直し、展望を開いていくことにつながることで、またその記録が、より長い探究過程を問い直していく上で重要な手がかりとなることを、こうしたゼミでの取り組みを通して実感してきました。

1995 年にはじまった探求ネットワークでも、最初から「わーい」というニュースを毎回編集発行し、複数の活動体（ブロック）をむすび、長い活動を支える媒体として活かしてきました。

1990 年代後半、附属中学校におけるプロジェクト学習、探究的な学習の展開を刊行本（註 2）としてまとめ著す企図は、直接現在の教職大学院の取り組みとつながっています。特別活動や音楽科の取り組みを軸として附属中学校で展開されつつあったプロジェクト学習の 3 年の展開を、ときどきにまとめられた記録をもとに、長いストーリーとしてとらえ返そうとする企図を通して、生徒たちの活動の展開、その積み重ねを通しての発展が次第に浮かび上がってくる。その長い問い直しを通して、私たち自身の活動やその発展の見方・捉え方や意味づけ方、そして描き方が次第に進化していく。実践展開を問い返し、描き、著そうとする試行錯誤を通して、この企図に加わった先生たち・そして私たち自身の学習把握・実践把握が発展していくことを実感しました。そのとらえ返しの中から、3 年間にわたる学年プロジェクトという新しい大きな、そして総合的なプロジェクト学習のデザインが生まれ、また大学側では、協働実践の展開とその記録化を通じた省察を軸とする大学院における新しいカリキュラムの構想が生まれました。それが 2000 年に出版した学校改革実践研究コースであり、現在の連合教職大学院のカリキュラムに直接つながっています。

自分自身の実践の歩みを節目ごとにふり振り返り、その曲折の中にある学びとその意味を探り、それを踏まえつつ今後の展開に視界を開く。Newsletter の中で私たちが重ねていく営みは、私たち自身の実践研究の重要な節となり、長い展開を支える軸につながり、そして多くの人たちとの照らし返しと共有をひらく企図ともなっています。それぞれのメンバーが、それぞれの学校で実践・探究・省察を進めていく学校拠点の教職大学院においては、そうした分散型のコミュニティを結ぶ媒体が多重に編まれていくことが極めて重要な鍵となることは、準備の段階から意識されていました。スタッフが要所で学校を訪れることと毎月の合同カンファレンス・ラウンドテーブルに加えて、Newsletter による共有と記録化によって互いの実践を結んでいくことが重要となると考えていました。この Newsletter に、海外の実践者から実践の歩みを伝える文章が寄せられるに至っています。協働探究としての学びをひらき、共有するこのメディアは、一大学院の枠を超えた、グローバル・コミュニティの要としての役割を果たしつつあるのかもしれない。

Newsletter の春は、教職大学院から新しい任地へ向かうメンバーのふり振り返りと展望の記録が著され、また新たにこのコミュニティに参加してくださるメンバーの自己紹介、これまでの経験と今とこれからをめぐるひとり一人のストーリーが語られるサイクルが続きます。より長い、またより広い実践・省察・研究を編み、新しい公教育を支える力を培う協働の企図、その重要なサイクルがはじまります。本年度も、どうかよろしくお願いいたします。

（註 1）この第一号は教職大学院のホームページからアクセスできます。

[ニュースレター | 福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学 連合教職開発研究科\(連合教職大学院\) \(fu-edu.net\)](https://fu-edu.net)

「発刊にあたって」には次のようにその目的が記されています。

「この通信は、それぞれの学校、それぞれの実践と研究の拠点と拠点、コミュニティとコミュニティを結び、互いの展開を共有するもう一つのコミュニティとなることをめざしています。同時にそれはこのプロジェクトの歩みをより広く伝え、記録する媒体でもあります。この通信を通して、互いの実践とそこでの省察と展望を伝え合い、より広く提起し、新しい歴史を重ねていきたいと思います。学校改革への積極的な提起と深い読み取り、長い展望と広い視界を、この通信を通してともに拓いていきたいと思います。」

(註2) 福井大学教育地域科学部附属中学校研究会編『探究・創造・表現する総合的な学習ー学びをネットワークする』東洋館出版社、1999.

補註：実践の省察とその共有を支える通信の意味と機能について、私自身は、国立市公民館保育室運営会議が編んでいた『保育室だより』から学びました。公民館で営まれていた共同保育のための保育室のいとなみ、そこでの子ども

たちの成長とそれを支える取り組み、そして公民館で子どもをあずけつつ自分たち自身の子育て・生き方を問い直していく学習の展開を、毎月発行するたよりに著し、共有し学習を組織していく実践は、何冊かの著作としてまとめられています。

国立市公民館保育室運営会議編『子どもをあずける』、1979、未来社。

国立市公民館保育室運営会議編『子どもを育て自分を育てる 国立市公民館「保育室だより」の実践』未来社、1985.

社会教育基礎理論研究会編『社会教育実践の現在(2)』叢書生涯学習生涯学習Ⅳ、雄松堂、1992.

村田晶子『「おとなの女」の自己教育思想形成への組織化研究ー国立市公民館女性問題・保育室活動を中心にー』未来社、2021.(近刊)

スタッフ 自己紹介



福井大学連合教職大学院 教授 清川 亨

こんにちは。令和3年度よりお世話になります清川です。38年前に福井大学を卒業し今回母校にお世話になるということで、緊張するとともにワクワクしています。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

福井県公立学校教員に採用されて中学校で6年、そして高校と県教育庁を何度か往復しながら16年ずつ勤務しました。この間を振り返り、この場をお借りして3点書かせていただきます。

1点目は、授業スタイルです。新採用2年目に学校全体で村上芳夫氏の「主体的学習入門」を教科書とし

て授業改善に取り組みました。今で言う反転授業です。生徒は予習で生じた疑問や質問を授業で解決するという流れです。予習しているので教科書に書いてあることの板書はしませんし、生徒はそれぞれが必要に応じてノートします。生徒からの質問がなければ、私から理解したつもりの生徒たちを揺さぶる質問をします。基礎基本に戻って考える姿勢を私は求め、生徒は互いに対話しながら学びを深めました。私は理科や化学の授業をこのようなスタイルで行ってきました。

2点目は、教員としての転機とその後です。初任からしばらくは何の疑問も持たず、枠からはみ出ず入試に合格できる生徒の育成に頑張っていました。10年程して、大学合格実績だけでなく、卒業生の大学

学、社会での姿勢が違っていると評価を受ける九州地方の高校のことを知りました。また、ほぼ同時期に、校則って何？全員同じであること自体がおかしい！そもそも学校教育って何！？と現地の高校で日々目からうろこだった2月間のアメリカ研修をホームステイとともに経験しました。これらが転機となり、当たり前は当たり前でないこと、そもそも、なぜ？何のために？背景は？を常に意識するようになりました。また、生徒の自律と批判的思考の育成の必要性を感じ、総合的な学習の時間の金津高校版「I P T」を教育課程上必置となる数年前に立ち上げ、国のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の研究指定を受ける藤島高校では、担当チームの一員として理系の一部から全校に対象を広げ、新たな学校設定科目の設置とその授業展開を進めました。併設型中高一貫校としてスタートした高志高校中学校では、自律と批判的思考に加え、それぞれが個性を伸ばし、多様な人からなる社会の皆を幸せにする人になることを校長として中高の生徒に求めました。

3点目は、福井県の県立学校や小中学校の管理職の方々をお願いしてきたことです。昨年度6月のラウンドテーブルの場でもお話をさせていただきましたが、本県の教職員は誰もが熱心だと思います。一方で、疲労困憊になりながら、場合によっては大事な家庭を犠牲にしてまで教師がなんでも先回りして準備をしていないでしょうか。それは時代が求めていることでしょうか。準備され与えられることに慣らされた生徒は、世の中が望む自律的な人、社会を幸せにする人となっていくのでしょうか。毎年度初めの学校の教育目標の確認は形式化し、目標達成に向けた手段である色々な取組みが目的化し、以前から続く学校の当たり前に疑問を持たず、外発的動機付けで生徒に無理やりさせることで、生徒の自律

とそのため大切な時間を奪ってはいないでしょうか。世の中は個々の個性を認めたいという協働や協調、社会全体の幸福を求めているのに、まず「和」が大切と自分を抑えてでも同調する精神的なものを求めているのではないでしょうか。不登校が多いのもこの辺りに原因があるように思います。大切なのは、子供たちが個性を発揮し自律することと、独善にならず一人ひとり違う人からなる社会全体の幸福の持続に向けて考え議論し行動することです。丁寧で鍛えるのではなく、求められるのは引き出す楽しむ教育です。学校の教育目標の達成に向けて、全職員がすべての取組みをそもそも、なぜで見直し、指導ではなく内発的動機づけをして子供たちを支援すること、例えば授業中寝ている子がいたら寝ている背景を考えて対応することなどが大事ではないでしょうか。

新採用からこれまで様々な生徒、教職員、保護者や同窓会、行政や企業の方々に直接あるいは本などで出会い影響を受けてきました。院生やスタッフの皆様、更に皆様とつながる方々との出会いと、これからの教育を共に考えていくことができることを楽しみにしています。改めて皆様どうぞよろしくお願いいたします。

なお、旅行（飛行機やドライブ）、F1（最近は少し離れています）、三国志（三国志演義は原文で読みました）から始まった歴史小説（今は宮城谷昌光氏の作品が中心です）、仏像・神社仏閣・古墳巡り、安くて美味しいもの（町中華、そば、天丼、食パン（米農家の親は嘆いてます）、コロッケ、粒餡（鯛焼きや田舎饅頭など）、IPA・日本酒・スパークリングワインなどをのんびり探しています）が好きです。皆様、遠慮なくご指南ください。



岐阜聖徳学園大学／福井大学連合教職大学院

教授 秋山 晶則

今年度から、福井大学連合教職大学院に参加させていただき岐阜聖徳学園大学の秋山と申します。本務校では社会専修に所属しており、日本史分野および博物館関係の科目を担当しています。

うどん県の讃岐平野で育ちましたが、ご承知の通り、年間降水量が極端に少なく、旱魃を繰り返したことに対応する文化（災害文化）として、満濃池に代表される溜池がそこかしこにあり、地域共同の厳しい管理を目の当たりにしてきました。これに対し、本務校のキャンパスは、木曽川・長良川に囲まれた輪中に位置し、古くから洪水常襲地帯として知られるように、河川氾濫に備えた水屋や土盛りをした水防建築、巨大な堤防など、溜池文化とは様相を異にする景観が広がっております。川は、地球における水や物質の循環という重要な役割を担い、私たちに大きな恵みをもたらす一方、時には大きな災厄をもたらす両義的な存在として、流域、地域に固有の文化を育ててきました。着任して十年余になりますが、この地では、どのような生活文化が営まれてきたのであろうかとの興味は尽きず、隙あらばフィールド調査と称して流域を歩き回り、伝来の古文書を拝見させていただいたりしています。

とは申せ、教員養成学部には所属しているからには、古文書にばかり熱中しているわけには参りません。本務校では、多様で幅広い臨床的能力を持った教員の養成を掲げ、2005年からは、「地域と密着した体験型教員養成プロジェクト」（クリスタル・プラン、略称CP）を展開しており、その一員としても取り組んできたところです。

このCPでは、目標とする実践的指導力について、大学で培う科学的認識と教育現場での実践的理解が結びついて結晶化するとの考えが前提にあります。そこで構成されたのが、教職・教科科目の柱を軸に、結晶化のコアとなる教職体験科目と子ども理解科目

の柱を加え、そこに階梯性を持たせた、理論と実践の往還を可能とする体系的プログラムです。

以後今日まで、附属学校はもとより、協定を結ぶ地域の教育委員会や200校におよぶ小・中学校との連携のもと、質の高い教員養成の実現を目指した取り組みを続けております。4年間の各階梯では、それぞれの指導目標に基づいて、その実質的な成果を検証するための評価項目・視座を設け、事前指導と事後の省察を通して複眼的な見方や判断力を磨く設計になっています。これらの取り組みは、教員・学生による学内評価と、学校現場や教育委員会による外部評価で構成され、プログラムの見直しや学部教育の改善にも結びつけてきた経緯があります。

その一つの成果が、本務校の高い教員就職率ともいえますが、課題も少なくありません。このプログラムにはすべての専任教員が参加していますが、急激に進む世代交代のなかで、趣旨を共有しさらに発展させていくための改革など、抜本的な対応が必要になってきています。また、鍵となる理論と実践の往還についても、ややもすると指導伝達型に傾くきらいがあり、「学びの専門家」へと教師観が大きく変化するなか、質的な転換を求められています。加えて、学校教育の課題が多様化・複雑化するなか、高度な専門性と実践力を身に付けた教師養成へと拡充が進む教職大学院制度への対応も図っていかねばならない、といった状況にありました。

そういう諸々の課題を抱えるなかで、5年前の2016年春、福井大学大学院の松木健一先生に本務校でご講演いただく機会があり、学校拠点方式をベースとして「学び合う専門職コミュニティ」を創り出していくという素晴らしい取り組みに触れることができました。本務校では、別途示された連合大学院構想を詳細に検討し、福井大学を訪問調査したうえ、夏には、連合にむけた検討会に奈良女子大学の方々とご一緒させていただくような流れとなりました。

その後、連合大学院設置にむけた動きが加速するのですが、事前リサーチ、文部科学省との折衝や申請準備を傍らで拝見しておりましたので、関係者の皆様

の大変なご苦勞を知るにつけ、せめて応援席で精いっぱい応援の旗を振らねば、と思い込んでいたのです。しかし、さにあらんや、因果は巡る？今度は大学院の一員に加わるという仕儀。教員としての高い専門性を培う重要なミッションのなかで、どのような貢献が可能かも手探りですが、福井大学・奈良女子大学がそれぞれに築いてこられた豊かな成果や、ラ

ウンドテーブルの20年を超える優れた実践にも学びつつ、教育研究活動に取り組む所存です。文字通りの初心にかえて、院生諸氏ともども学びを進めていきたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

院生 自己紹介



東 哲平 あずま てっぺい

はじめまして。この4月から福井大学連合教職大学院に入学しました東哲平と申します。所属は授業研究・教職専門性開発コースの授業研究専門性開発アプローチ(4系)になり

ます。昨年度までは福井大学教育学部学校教育課程の中等教育コース人文社会教育サブコース(社会科専攻)に所属しておりました。そこで中学校1種(社会)、高等学校1種(地歴)(公民)の教員免許を取得しました。

学部の4年間は、中等教育(中学校・高校教育)及び社会科教育を中心に学んできました。また、「探求ネットワーク」という活動を通して地域の小中学生とかかわったり、個別的な学習支援を行う「ライフパートナー」活動にも取り組んだりすることができました。大学で学んできた中で教師の授業以外の様々な側面(学級経営・学校行事・生徒指導・部活動など)に気付くことができた教育実習はとても貴重な経験でした。

それだけではなく、社会科として教科教育についても学ぶことが多かったです。所属していたゼミが社会系教育を中心としたものだったこともあり、「覚

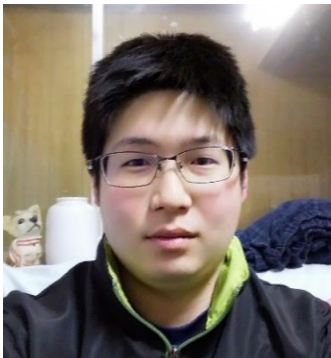
える」教科という面ではなく、「考える」教科としての社会科教育について興味を惹かれ、学んできました。卒業研究は「中等教育における公民系科目と道徳の接続に関する研究:公共の授業開発」をテーマとして新学習指導要領を見据えた新しい公民科目の在り方について考察し、授業プランの開発を行いました。そのような研究やゼミ、数々の講義や教育実習を通して社会科教育が抱える課題、それを解決する方策、そして新たな社会科教育の在り方について多様な見識を得ることができました。大学(学部)入学前そして入学当初は社会科の授業を如何に分かりやすく教えられるかということしか考えていませんでした。社会科は暗記教科という認識を拭えない中も、覚えるのではなく知識を活用することの重要性を大学で学んだのです。

しかし、世界的なパンデミックの状況が突然私たちの生活を一変させたように時代は予測困難なものへと本当に変わってきていることを体感したことで、これからはただものごとを覚える学習ではなく、知識を自分で使えるようにしていくことが求められていることを痛感しました。社会科としては、複数のデータから適切な情報選択をして根拠に基づいた議論あるいは意見の構築を行い、社会的な事象や問題

にアプローチすることのできる能力を育成することが重要だと考えるようになりました。

とは言うものの、まだそのような能力育成を図れる授業力も授業以外の仕事についても技量が不足していることは否定できません。だからこそ、社会科としての指導技術や授業構想力をさらに培い、また教師として子どもの成長を支えられるようなかわり方を学んでいき自身を成長させていきたいと思ったのです。これが学部を卒業し、さらに 2 年間大学院

に身を投じるという進路を取った大きな動機です。大学院で理論的に考え学び、県内外の多様な教職関係者と意見を交わしながら、インターンシップで現場に入りながら教師の仕事に触れることに自分自身の教師力向上を期待できるのだと考えています。2 年間学べるこの貴重な機会と環境を無駄にすることなく、実りある自己研鑽ができるよう精一杯大学院生活に臨んでいきたいです。何卒、宜しくお願い致します。



岩本 幸裕 いわもと ゆきひろ

初めまして。福井大学教職大学院 M1 の岩本幸裕です。出身は福井県で福井大学教育学部から進学しました。学部の時には特別支援

サブコースで特別支援教育について勉強をしてきました。学部時代には特別支援学校や特別支援学級の子どもたちと関わっていく FFC(ふれあいフレンドクラブ) に所属し、3 年間子どもたちと関わってきました。FFC での関わりは先生ではなくお兄さんのような関係でかかわっていましたが、自分自身の障害理解や様々な教材作りなど学ぶものは多かったと思います。また、学部時代には特別支援学校に行き、教材研究や実習を行ってきました。子どもたち 1 人 1 人に合わせた教材作りや支援方法など勉強して特別支援教育の難しさと同時にやりがいを感じるようになりました。今後は教員という立場で子どもたちと関わっていくことになるとと思いますが、大学院では教員として現場に出ていく前に、長期インターンシップを通して障害のある子どもたちとの関わり方や授業

作りなど、自分の引き出しを増やしていきたいと考えています。また、学校現場での実践に加えて、子どもの発達段階や障害の特性など理論も同時に勉強をしていき、うまく実践とつなげていけるように努力をしていきたいと思います。障害のある子どもたちは様々な困難を抱えていることが多いと思います。人とかかわり方であったり、自分の思いをうまく人に伝えられなかったりと 1 人 1 人によって困難さは異なってくると考えられます。そのような子どもたちに対して、みんなが過ごしやすい、楽しいと思えるような学校生活を作っていくにはどのような支援、関わり方が必要となるのか考えていきたいと思っています。子どもたちから信頼され楽しかったと 1 日を終わられるような活動づくりのできる教員、担任になれるように努力していきたいと思っています。インターンシップ先の先生方や大学院の先生方にはご迷惑をかけることもあるかと思いますが、ご指導のほどよろしくお願い致します。



市川 海斗 いちかわ かいと

初めまして。この度、福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性コースに入学しました市川海斗です。岐阜聖徳学園大学の外国語学部で小学校、中学校（英語）、高校（英語）の免許を取得し、さらに学びを深めるため、大学院に進学しました。

専門の教科は英語ですが、子供の頃の私にとって英語は全く意味がわからず、英語を話せる人は神なんじゃないかと思うほど自分とは全く関係のないものだと思い込んでいました。しかし、教科の「英語」からは逃げられないため、大きな不安を抱えて中学校の英語の授業に挑みました。そこで、英語をカッコよく話し、丁寧に教えてくださる先生に出会い、いつの間にか不安は消え、最終的には英語は中学校のテストで唯一 100 点を取れた得意科目に変わっていました。これが私と英語との出会いです。

そんな英語ですが、高校に進学し、レベルが上がると、全く点数が取れなくなり、すぐに苦手科目に変わってしまいました。しかし、英語を使いこなすカッコよさへの純粋な憧れはすてきで、もう一度英語を頑張りたいと思い大学で英語を専攻することになりました。大学では TOEIC800 点を目標とし、英語学

習を進めていきました。TOEIC のスコアを伸ばしていく中で一番こだわり、成果を実感した学習法は私が大学院で研究をしていきたいと考える音読学習です。TOEIC の学習では主にシャドーイングを実践していましたが、音読学習にはシャドーイング以外にも、リピート、サイトトランスレーション、オーバーラッピングなど様々な学習方法があります。どの方法にも共通して言えるのが、誰にでもできることです。音読するための文章と音源さえあれば、英語の実力関係なく、好き嫌い関係なく、誰でも、どこでも取り組むことができます。そんな取りかかりやすさが、英語ができない自分に合い、TOEIC のスコアを伸ばすことができました。これを、英語の力、好き嫌いもバラバラな子供が集まる学校教育に生かしていくことで、より良い英語教育につながると考えます。そんな音読学習ですが、すでに多くの場所で先生の後にリピートする、10 回読んだら着席するなどの方法で授業に取り入れられています。しかし、同じ文章を毎回同じように読むため、作業の要素が大きくなってしまい子供が飽きてしまうという問題があります。先程述べた様々な方法の学習方法を取り入れる、子供の実態に応じて発展的な内容に挑戦するなど、誰でも飽きることなく、確実に英語の力をつけることができる音読学習について、この教職大学院で考えていきたいです。



河野 茅乃 こうの かやの

はじめまして。この度、福井大学連合教職大学院に入学いたしました河野茅乃と申します。所属は授業研究・教職専門性開発コースの授業研究専門性開発アプローチ(4系)になります。昨年

度までは、福井大学教育学部初等教育コースに所属し、主免は小学校、専門教科として社会科を選択し、学部時代に小学校一種、中学校一種(社会)、高等学校一種(地歴)(公民)の4つの免許を取得いたしました。

私が教師になりたいと思ったきっかけは、福井大学教育学部附属中学校(現、福井大学附属義務教育学校後期課程)在学時に、学ぶことの楽しさを教えてくださった社会科の先生に憧れ、同じ教師という道を

志したいと思ったことでした。具体的には、今導入が進められている「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた探求的な授業でした。教科書には答えが書かれていない事柄を友達と議論しながら進めていく授業の面白さを今でも覚えています。

学部での4年間は専門の知識を学びながら、実践として学内では探求ネットワークやライフパートナー、こころのパートナー、介護等体験、教育実習などを経験し、学外では児童養護施設での学習ボランティアや塾・予備校でのアルバイト、地域人材育成支援事業CST養成事業実施委員会主催の学校インターンシップなどでさらに多くの子ども達と関わってきました。このように学部時代は1年次より様々な実践を経験し、その中で大学の講義等で自分に足りない部分を学んだり、逆にその学びを実践で活かしていったりと、理論と実践を往還しながら密度の濃い学びを得ることができました。一見繋がりがみえない1つ1つの実践の点が、今では全てが線でつながっていると思っています。

しかし、学部時代に経験した実践は短期的なものばかりで、これらの実践だけでは長期的な子どもの見取りはできませんでした。教師は子どもの成長を促すために、目の前の子ども達を見ながらも先を見通すことができるようにならなければいけないと思います。教職大学院では1年間という長期的なインターンシップの中で、子どもの成長やそれを支える先生方の姿を学校現場で学ぶことができます。イン

ターンシップでは授業研究や実践だけでなく、学校現場の全てを見ていくことで、今必要とされる教育とは何かを問い直していきたいと思っています。

また、私は生まれてこの方福井の教育しか受けてこなかったため、福井の教育の良さや課題などは自分自身が感じてきたことしか分かりません。教職大学院で県外の先生方と交流し、新たな視点を養うことで、自分の経験だけでは分からない多面的・多角的な視点から福井の教育に携われるようになりたいと思います。

さらに私は3歳より日本舞踊、小学生よりチアリーディング、中学校では合唱、高校生より茶道・華道と様々なことに時間をかけて取り組んできました。今年からまた何か1つ新しいことを始めたいと考えていますが、これらの経験が与えてくれた忍耐力、継続力、達成感、仲間づくりも、未知なるチャレンジに目を輝かせている子ども達の背中を押してあげられると自負しています。

子ども達と長期間、じっくり関わっていくインターンシップは初めてです。小学生という人格形成に大きな影響を与える大切な時期に「先生」として関わっていくので、一人ひとりの児童としっかりと向き合い、日に日に成長する子ども達と一緒に成長していきたいと思っています。教職大学院の先生方やインターンシップでお世話になる中藤小学校の先生方から多くのことを吸収し、充実した2年間にしていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。



川畑 優希 かわばた ゆき

はじめまして。今年度から連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学することになりました川畑優希です。昨年度3

月までは、福井大学教育学部初等教育コースに所属していました。取得免許は、小学校一種、中学校一種

(国語)、高等学校一種(国語)、特別支援学校一種です。

大学では、教育実習やライフパートナー活動や短期のインターンシップ、講義での授業参観などを通して多くの子どもたちと関わったり、学校での子どもたちの様子や先生方の授業を見学させていただいたりする機会がありました。私は、初等教育コースの中でも2系という子ども理解系に所属し、幼児期からの子どもの育ちについて学びました。2系には「子

子どもと人間関係」、「子どもと環境」、「子どもと表現」という子どもシリーズと呼ばれる独自の講義があります。それらの講義では、隔週福井大学教育学部附属幼稚園や福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程へ行き、遊びの時間や低学年の授業を参観し、そのときに見取ったことや考えたことを他の受講者や教授たちと話し合いました。講義の総まとめとして、参観を通して気づいたことや学んだことをポスターにまとめ、ラウンドテーブルで発表し、外部の方の意見もいただきながら学びを振り返るという活動を行っていました。

卒業論文では、2系の子どもシリーズがきっかけで興味を持った幼小連携・接続について研究を進めました。研究を進めるにあたって、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムの報告書を読んだり、小学校の図画工作科の造形遊びの授業を参観したりしました。何度も参観を行っていくと、小学校の図画工作科で見られる子どもの姿と幼稚園の遊びにおいて見られる子どもの姿には、共通する部分がたくさんありました。そこで、幼児教育の遊びで育む資質・能力と図画工作科で培われる見方・考え方をつなげるフレームワークを造形活動に取り組む子どもの姿から探り、図画工作科からみる幼小連携・接続の在り方を考察しました。

学外の活動では、アルバイトで集団、個別塾の講師をしていました。子どもたちに分かりやすく勉強を教えるだけでなく、子どもたちや保護者と信頼関係を築くことや一人ひとりの子どもに寄り添って学習をサポートしていくことの大切さも学ぶことができました。アルバイトの経験は、教育実習やインターンシップで子どもたちと関わったり、授業をしたりする上で大変役に立ったと感じています。

大学4年間で様々な講義を受けたり、教育実習やインターンシップなど教育現場での実践を行なったり、卒業論文を作成したりしていく中で、現在の学校教育について疑問に思うことやより深く学びたいと思うことが多々ありました。大学院の2年間では、それらについて長期のインターンシップを通して、自分なりに見取り、考え、現場の先生方や先輩方、同期の学生と話し合い、学校教育の現状と課題、教材研究や授業の進め方、子どもとの関わり方についてさらに深く考えていきたいと思います。そして、2年後、教師として現場に出たときには、大学院での長期のインターンシップや講義で学んだことを活かし、即戦力となれるよう日々勉学に励みたいと思います。

教職大学院の先生方やインターン配属校の先生方の貴重な時間をいただくと共に、ご迷惑をおかけすることもあると思いますが、これから2年間何卒よろしくお願い致します。



前田 光哉

初めまして。今年度より福井大学連合教職大学院授業開発・教職専門性開発コースに入学しました、前田光哉と申します。昨年度までは岐阜聖徳学園大学教育学部・理科専修に所属していました。5歳から書道を習っており、書道の先生の免許も持っています。現在は次の昇段試験に向けて日々鍛錬しています。趣味は釣り、スノ

まえだ こうや

ーボード、キャンプ、サッカー、走ること。自然が大好きです。

大学では書道を4年間とサッカーを少しやっていました。卒業研究では理科における粘り強さという資質・能力の育成というテーマの下、理科学習の中で生まれる「分からない」という状況での生徒の振る舞いと、その振る舞いが学力に与える影響について明らかにする研究を進めてきました。この研究と進学の動機について少し詳しく書かせていただきます。

私は中学生の時、テストでとにかく点を取るために「分からないところは調べるよりもまずは覚える」

という調子で質より量の学習を続けていました。当時は長時間勉強している自分に満足し、安心していました。しかし、実際は「なぜ？」という疑問があっても向き合わず、問題解決のプロセスを避けていたため、本当に時間を掛けなければいけない考える時間を疎かにしていました。その結果、高校進学後、知識が整理されておらず、全く応用ができないという状況に陥り、何を改善したらいいのか分からないまま三年間を過ごしました。その後、岐阜聖徳学園大学への進学を機に自分の学ぶ姿勢について本気で考え、今まで自分は「なぜ？」という些細な疑問に向き合い考えることから逃げ続けてきたことをはっきりと認識しました。そこから講義や教育実習、ゼミなどを通して自分の学びの姿勢を改善しました。その中で生まれた「本質的な粘り強さとは何なのか？」という疑問

間に向き合った結果、今の研究に辿り着きました。

研究を通して、質の高い学びを支えている要因の1つは「疑問」であり、それに対して時には1人で、時には仲間と共に向き合うことで深い学びを創出できることを実感しました。また、教育実習で子どもたちは自分たちが思っているよりも身近なことに対して疑問を持ちながら生活していることを知りました。今後はさらに研究を続け、児童・生徒の質の高い学びを支えるための知見を深めたいと強く思い、進学を決めました。

大学院では常に懐疑心をもって実践と省察に取り組めます。そして生徒が安心して考えられる環境を作り、「疑問」を大切にしたい授業を実現できるように日々努めて参ります。これから2年間どうぞよろしくお願いいたします。



窪田 真一

初めまして。今年度より授業研究・教職専門性開発コースに入学いたします窪田真一と申します。昨年度までは、福井大学教育学部学校教育課程初等

教育コース小学校教育サブコースに所属し、さらに専門教科として音楽を専攻して学んできました。

取得免許は、小学校1種、中学校1種（音楽）、高校1種（音楽）です。

大学時代には、3年次から作曲を専攻しました。幼少期からピアノを習い、中学校から現在まで学校や一般団体などの吹奏楽部に所属するなど、これまでにさまざまな作品を演奏する経験をしてきました。しかし、作曲の〈自らのイメージや感覚を基に1から音楽を作る〉という初めての経験を通して幅広い音楽に触れることができ、音楽を作ることの面白さや表現する楽しさを追求したいという理由から作曲を専攻することに決めました。作曲を専門的に学んだ2

くぼた しんいち

年間で、ピアノ曲や声楽曲、クラリネットとピアノによるアンサンブル曲や木管五重奏曲、Tuba 五重奏曲の5曲を作曲し、各楽器の構造や音色の特徴だけでなく特殊奏法などの演奏技法や十二音技法をはじめとする作曲技法を学びました。これまで古典派やロマン派の音楽や吹奏楽曲、J-popしか聴いたことがなかった私にとって近現代の音楽はとても斬新なものであり、音楽に対する印象が大きく変わり音楽の創作や表現を探究したいと思える契機となりました。また、作曲活動を重ねるにつれて音楽科での〈表現〉について考えるようになりました。音楽には正解がなく、自らの想いを自由に表現できる一つの方法でもあります。作曲活動を通して様々な表現方法を体験的に学び、そこから感じたことや学んだことを音楽科における音楽づくりや創作などの分野に還元していきたいです。子どもが伸び伸びと想いを表現でき、意欲的に音楽に向かうことができるような環境を整えるためにも、今後も作曲を専攻して私の持ち味を活かしていけるよう努力したいです。

さらに、大学院では作曲に加えて音楽教育についても学びたいと思っています。音楽科は音楽に触れた

経験があるか否かで能力に差が出やすく、好き嫌いははっきり分かれる教科だと考えています。これは音楽科にとって大きな課題であり、その改善のためには全ての子どもが様々な音楽に触れることができる機会を保障し、将来、子どもが文化的で豊かな生活を送る一つ的手段になるように配慮して授業を展開することが重要になります。そのような授業を行っていくためには、子どもの姿に応じて教材や授業展

開を柔軟に変化させることが求められます。その変化の軸にあるのは学習指導要領をはじめとした理論であり、それらの理論を基にして考案された子どもの好奇心や発意を引き出すことができる実践です。大学院では、インターンシップに加えて音楽の専門的な授業が設けられています。2年後に教員になることを見据えて、インターンシップを通して自らの体験と理論を結び付けられるように学び続けていきたいです。



五十嵐 彩香 いがらし あやか

はじめまして。今年度より授業研究・教職専門性開発コースに入学しました五十嵐彩香です。昨年度までは、福井大学教育学部初等教育コースに所属しておりました。取得免許は、小学校一種、中学校一種（数学）、高等学校一種（数学）です。

私は、小学校5年生のときの算数の先生との出会いがきっかけで、教師の道に興味を持つようになりました。自分が幼いころは、「わからないことが恥ずかしい」「間違えることが怖い」という不安を持ったまま授業を聞いていました。しかし、その先生から「わからないことを聞く勇氣」や「失敗を恐れないことの大切さ」を教えもらいました。さらに、わからないことは恥ずかしがらずに友達に聞くことで、新しい気づきや発見を得て算数を学ぶ楽しさを知ることになりました。この教え合い・学び合いの授業は、今の私に大きな影響を与えたものとなっています。このような経験を通して、将来私も子どもたちに教科指導をするだけでなく、生きる上で大切なことも伝えていく教師になりたいと思い、教育学部へと進学することを決めました。

大学では、主に算数・数学教育について学んできました。多くの人が「算数や数学は将来何の役に立つの

か」と考えたことがあると思います。例えば、角柱の体積を求めることに何の意味があるのでしょうか。その答えとして私は、論理的な思考の育成の為であると考えています。予測困難な時代となった今、未来の創り手となるために論理的に考える力は重要な資質・能力の1つです。そこで主免教育実習では、6年生を対象に一般的な角柱（底面が平行四辺形や台形など）の体積の求め方を考える授業を行いました。思うように授業を展開することができずに悔しい思いをしましたが、子どもたち一人ひとりが初めて出会う問いに対して自分なりに考え、論理的に答えを導き出していく姿を見ることができました。予想外の答えも出てきましたが、頭の柔らかい子どもたちと一緒に過ごすことで、私が新しく学んだこともあり教師の仕事の面白さを実感しました。

大学院では、インターンシップの中で挑戦と失敗を繰り返しながら、教師としてのスキルアップを目指していきます。楽しいだけの授業ではなく、楽しく学びの深まる授業をするには何が必要なのかを実践を通して考えていきたいです。また、自身の関心のあがる幾何教育に焦点を当て、数学教育のカリキュラム研究も進め、「実践力・専門性・研究力」の3つを高めていくことを目標としています。これから始まるインターンシップについて、不安なこともたくさんありますが、配属校先や大学院の先生方、子どもたち、他の院生から多くのことを学び自分の成長へと繋げていきたいと思っています。これから2年間どうぞよろ

しくお願いいたします。



岩瀬 夢有人 いわせ むうと

初めまして。この度、福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性コースに入学しました岩瀬夢有人です。昨年度までは岐阜聖徳学園大学の教育

学部 体育専修に所属していました。

私はこれまで、大学1年生から4年生まで岐阜県の小中学校の教育現場に入り、教育実習を行ってきました。特に、保健体育の授業では目的や目標、指導方法などを明確にし、学習指導案を作成してきました。実際にその学習指導案で授業をしてみて、良かったところや悪かったところなどを授業後に担当教諭の先生やほかの体育教師の方からのアドバイスを含め反省会をし、次の授業への改善に取り組んできました。なかなか思うようにいかず、苦戦する日々もありましたが、児童・生徒のことを一番に思い、いろいろな工夫もいれて指導案を作成し授業を行ってきました。

さらに、大学3年生の時に、大学2年次に行く野外活動の運営や補助のスタッフとして携わり、参加しました。野外活動の事前打ち合わせや、活動内での安全を補助したり、計画内容がスムーズにいくよう指示を出したりしました。また、私は11年間今もですが継続してバドミントンを行っており、小中学生のバドミントンクラブチームの指導者として活動するな

ど、ボランティア活動にも力をいれて取り組んでいます。

私は今後、この教職大学院での長期インターンシップにおいて、もっと現場で生かせるような資質・能力・知識を身につけて生徒に学校教育活動及び体育授業での「豊かな人間性」を身につけさせ、高めていきたいと考えています。

豊かな人間性を育成するために、社会性・人間関係・協力的態度などがあります。特に私はこの中でも、「協力的態度」に重点をおき、体育授業で「何事も協力すること」について力を入れて取り組んでいきたいです。

体育授業の中で協力することはたくさんあり、生徒同士が協力することはもちろんですが、教師と生徒が協力する場合もあります。協力する場合は、チームプレー、教え合い、器械運動等の補助、役割分担して仕事をするなど、体育授業を創り上げるうえでとても重要なことです。この「協力すること」を生徒が常に考えて行動できるように授業計画をたて、指導していきたいと考えています。

これまで取り組んできたことを十分に生かし、さらによりよいものにしていくために意図や熱意、向上心を持って取り組んでいきたいです。一年生でまだまだ未熟なところが多いですが、周りからいろいろな刺激を受け、自分の引き出しを増やし頑張っていきますので、週間・月間カンファレンスやラウンドテーブル等で、ご指導宜しくをお願いいたします。



立石 虎太郎 たていし こたろう

はじめまして。この度、福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性コースに入学致しました立石虎太郎と申します。昨年度までは福井大学工学部物質生命化学科に

所属していました。取得免許は高校一種(理科)です。自分は高校時代に多くの先生方に部活・学習面の両方からサポートをしていただいたことをきっかけに教員という職業に憧れを感じ、高校教員を志しました。また進学の際、「高校教員を目指すなら、教育学部以外の方が科目についての専門性を身に付けられる」との言葉と、実際に母校では教育学部以外を出身とされる先生が多かったこともあり、大学進学時は工学部かつ高校教員免許が取得できる福井大学工学部に進学しました。実際に学部での4年間では工学部ならではのより発展的・専門的な授業やシミュレーションを用いた分析研究の経験などから実社会における科学の役割とその重要性を体感することができました。また同時に自身の知識や論理的思考を深めることができました。またその一方で教員免許を取得するための講義・実習を通して、自身の教員としての力不足も実感しました。どんなに知識を持っていたとしてもその

知識を使いこなすことができなくてはより良い授業を行うことは出来ません。また、教員としての仕事は授業で知識を教えることだけではなく、学校生活すべてを通して生徒が成長する手助けをしていくことだと思います。これらの気持ちからより教育について学びたい、そして教員としての力を身に付けたいと思い、この大学院に入学しました。

大学院では、工学部出身という視点を生かしながら、生徒一人ひとりの自ら学ぶ力を育てることが出来る発展的かつ創造的な理科教育について研究を進めていきたいと思っています。また、現場での長期インターンシップと大学院でのカリキュラム開発やカンファレンスを通じた理論と実践の往還から、新しい時代に必要とされる生徒とのかかわり方や授業実践、教員間の連携、教師としての仕事などを学び、身に付けていきたいと考えています。

今、日本の教育は大きな転換期を迎えています。生徒の学力低下や教員の働き方改革など様々な問題を抱える日本の教育をより良くしていくためには、まず教員自身が自ら考え、柔軟に変化し、成長できる人材とならなくてはなりません。院での学びを通し、これからの教育をリードできる人材になれるよう、この2年間で大切にそして懸命に過ごしていきたいと考えています。これからよろしくお願い致します。



古田 悠人 ふるた ゆうと

初めまして。授業研究・教職開発専門性コースに入学しました古田悠人と申します。よろしくお願い致します。まず、私という人物に興味を持ってほしいため私

のことを述べていきたいと思っています。私は岐阜県岐阜市出身で高校まで野球をしており、現在は中学生のクラブチームで指導者をやらせてもらっています。高校時代は岐阜県ベスト4まで勝ち進みました。私は当時それなりに活躍し、少し有名になることができました。ちなみに活躍というのはスタンドでの応援団長としてです。長良高校のインシヤルの「N」を頭に残した結果、それなりに反響が良かったです。

さて、こんな目立ちたがりの私ですが、大学でもその目立ちたがり精神は健在で、大学の学園祭の漫才大会では見事優勝することができました。（3組中）他にも、フレンドシップという活動の学生代表を務めました。

そんな私は幼いころから教師を目指しており、小学校一種・中学校社会一種・特別支援学校一種（肢・知・病）の免許を取得しています。これから2年のインターンシップでは岐阜聖徳大学附属小学校に配属されました。

上記で少し述べましたが、私はフレンドシップという活動を通して子どもと関わり、その子どもを楽しませる学生の代表を務めました。フレンドシップとは年間7回抽選で選ばれた約200人子どもを大学に呼び、学生160人が企画するといった活動です。私はこういった活動を運営する中で、「組織」というものがどうあるべきか疑問を持ちました。活動が約15年続いていることもあり、やり方や進め方などだいたい決まっているものを毎年同じようにやってきました。私が代表を務めたときも例年通り進めてきました。しかし、活動を考える中で本当に今やっていることは子どものためになっているのかという疑問

を覚えました。実際学生がやりやすいようにやっている部分も多くありました。私はこの疑問は教育現場にも通ずるものがあるのではないかと考えました。実際に教育現場を見た際も改めて、なぜこのようなことをするのだろうかと思う部分も多くありそれらは教師がやりやすいからなのではないかと考え、教育現場にもこういった課題があると感じました。こういった課題をどのようにしたら解決できるのか、また実際はどのような組織論で現場は動いているのかを深く学びたいと思い、大学院への道を進もうと考えました。

私はこれから職員はどのように子どものことを考え、どのように動いていくのかに注目し、インターンシップで職員の話を聞いたり、自ら観察したりし、カンファレンスやラウンドテーブルでは自分が知らない地域の教育現場の話を聞き、現状を把握して課題を考えていきたいと思います。

約1年前のラウンドテーブルに参加した時に、大学院生の姿、言動に感動したため、私も深く学び、深い部分まで話せるようしっかり学んでいきたいと思っています。2年間よろしくお願いします。



大澤 美貴 おおさわ みき

はじめまして。4月より福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました大澤美貴です。昨年度までは、福井大学教育学部中等教育コースに所属していました。教員免許は、

小学校2種、中学校1種（技術・家庭科）、高等学校1種（家庭科）を取得しています。

学部時代には、技術科を専攻しておりその中でも情報分野について研究をしてきました。卒業研究では、新たに小学校プログラミング教育の必修化を含め、中・高等学校を通じてプログラミング教育を充実

させることが導入されたことを機に、プログラミング教育に関することを行ってきました。情報活用能力の向上に焦点が当てられた教育は、今後もさらなる進化を遂げ、求められるものが非常に大きくなっていくと考えられます。その度に教員は授業を通してICT機器などを活用し、プログラミング的思考力の向上に従事していかなければならないと考え、現在の実態を現職の教員を対象としたプログラミング教育に対する意識調査などを実施してきました。

私が技術の教員を目指す上で、最も影響を受けたのは3年時の教育実習です。中学校3年生の技術の授業を参観していると、生徒たちのほとんどが寝ていたり他教科の学習をしていたりするなど、授業に取り組む姿勢が薄れていると感じました。何人かの生徒に授業に集中できない理由を尋ねると、ほとん

どが「受験科目に必要ないから。」という返答があったことがすごく印象的でした。確かに3年生にもなると、受験のことを強く意識し始める時期かもしれませんが、技術という授業は中学校の3年間でしか学ぶことのできない貴重な教科でもあるため、技術の面白さを伝えていけるような教員になりたいと思いました。

大学院では、4月から始まるインターンシップで技術の授業を中心に一教員として学校現場で学び、授業実践を行うことができるため自分のスキルアップに繋げるためにも、その日の振り返りを大切にしていこうと考えます。また今回、私の配属校では技術の教員が特別支援学級の生徒を対象とした授業を行うことになっています。その際に、現場の先生方がどのように生徒の発達状況に応じた授業の構成や発問の仕方、工具やPCを使用した実習を行う時の支援など授業を観察していくなかで多くのことを学んでいきたいです。

教師を目指す上でまだまだ力不足なこともあり、たくさんの方々にご迷惑をおかけすることになるかと思いますが、これからの2年間よろしく願っています。

習へ行きましたが、自分が思っている以上に自分の知識・力量不足を感じました。特に小学校の実習では二週間という短い期間で授業を学ぶ・作ることで子どもたちとの関係性を作っていくことだけで精一杯で、このまま学校現場に立ってもいいのかと疑問を抱き、自分に自信が持てませんでした。今の自分ではダメだと思い、大学院進学を考えていた時、福井大学連合教職大学院で行われている長期インターンシップの実践やカンファレンスなどを知り、自分に不足している実践力を身に付けられるのではないかと考え、進学を決めました。

魚見 晏那 うおみ あんな

はじめまして。今年度から福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、魚見 晏那と申します。昨年度までは、武庫川女子大学健康・スポーツ科学部に所属していました。取得免許は、小学校二種、中学校一種(保健体育)、高等学校一種(保健体育)です。また、三年間の免許取得プログラムで小学校一種免許の取得を目指しています。私の所属していた大学の学部では健康づくり、スポーツの指導・マネジメントの方法、競技力向上のためのスポーツ科学などの幅広いスポーツの分野について学びました。また、中学校から大学までの十年間陸上競技(走幅跳・三段跳)を続けており、大学時代は選手だけでなく審判として大会に参加していました。

私は高校生の時に会った先生のような教員になりたいと思い、教職を学べる学部へ進学しました。私は体育専門の小学校教員になりたいと思っていたため、所属していた学部では中学・高校一種免許(保健体育)を取得し、集中講義を活用し小学校二種免許を取得しました。私が所属していた学部ではスポーツを専門としているため教職だけでなく、障がい者スポーツやレクリエーションなども学ぶことができ、体育の授業でも活用できるのではないかと考え、大学では様々な学びに取り組んでいました。そして大学在学時に高校へ三週間、小学校へ二週間の教育実

習へ行きましたが、自分が思っている以上に自分の知識・力量不足を感じました。特に小学校の実習では二週間という短い期間で授業を学ぶ・作ることで子どもたちとの関係性を作っていくことだけで精一杯で、このまま学校現場に立ってもいいのかと疑問を抱き、自分に自信が持てませんでした。今の自分ではダメだと思い、大学院進学を考えていた時、福井大学連合教職大学院で行われている長期インターンシップの実践やカンファレンスなどを知り、自分に不足している実践力を身に付けられるのではないかと考え、進学を決めました。

大学院では、カンファレンスやラウンドテーブルなど充実した環境の中で様々な人と協働し、学ぶことで自分の力量を培いたいです。お忙しい教職大学院の先生方やインターンシップ配属校の先生方の貴重な時間をいただくと共にご迷惑をおかけすることになると思いますが、将来自信を持って学校現場に立てるように頑張りたいです。新しい環境での授業やインターンシップでの学びは正直不安ではありますが、この充実した環境の中で成長しつつ、学び続けるという姿勢を忘れずに成長していきたいです。

3年間ご指導のほど、よろしくお願いいたします。



小泉 毅 こいずみ つよし

はじめまして。4月より福井大学教職大学院に入学した、小泉 毅(こいずみ つよし)と申します。出身地は福井県で、出身大学は福井県立大学です。大学では経済学を学びました。取得免許は高等学校一種(公民)です。教職大学院にて、新たに中学校一種(社会)、高等学校一種(地理歴史)を取得する予定です。

昨年度までは、ミクロ経済学・マクロ経済学を始めとした経済に関する専門的知識について学び、ゼミでは日本経済史を取り扱いました。経済に関して、義務教育段階や高校において、深く学ぶ機会は多くありません。しかしながら、国や世界を豊かにすることを考えるときに、経済というものに関する一定の知識や理解が求められます。激化する競争の中で、より豊かな暮らしを実現するためにも、経済学について学ぶことは非常に重要です。18歳で有権者になる以上、中学や高校の授業で政治・経済について、より踏み込んだ内容を取り扱うべきだと考えています。

また、上記の話とも関連しますが、経済には「選挙」が大きく関わっています。具体的には、税金の集め方

や富の再分配の在り方が、選挙によって決められます。現在の日本は、少子高齢化が進み、年齢階級別人口に大きな偏りが生じています。さらには、投票率に関しても同様の偏りが生じており、若者の意見が反映されづらい世の中になっています。同時に、富の再分配についても高齢者に偏っています。このような、高齢者の意見が反映されやすい状態を「シルバー民主主義」と呼びますが、その原因は高齢者というよりもむしろ若者の投票率の低さにあります。私は、社会科の教員を志す者として、この現状をなんとか打破したいと考えています。日本が、若者に投資をする国になって欲しいと強く思っています。そのためには、若者の意識を変える必要があります。私は、教職大学院で「主権者教育」について、より力を入れて学びたいと思っています。児童生徒が選挙に関心を持ち、自分の意見を一票として投じることができるような大人になってほしいと考えています。これらを実現するために、教職大学院で社会科教員としての専門性を高めていきたいです。

最後になりますが、これからお世話になる福井大学ならびに教職大学院の先生方、インターンシップ先の学校の先生方、教職大学院の先輩方、同期のみなさん、しばらくの間、どうぞよろしくお願い致します。



令和2年度 運営協議会 報告

オンラインだからこそその「カタチ」を企図して

新たな学習指導要領が小学校でスタートする年となった令和2年度は、その基点となった中央教育審議会答申（平成28年12月）に記載されていた文言のように、社会全体が複雑で予測困難な状況に、新型コロナウイルス感染症の影響により直面することになりました。

そこでここでは、本大学院と協働する大学、学校、教育機関との重要な連携の場である運営協議会について、この1年間の試行錯誤の途行きを振り返りたいと思います。

1. 改めて問われた位置付け

運営協議会は、大きく二つの会議から成っています。連合教職大学院の運営に関する事項を協議する「運営協議会」と、授業科目の開発など教育課程の編成に関して協議する「教育課程連携協議会」です。年に2回、関係協働していただいている各機関・学校の管理職の先生方にお集まりいただき、方向性について語り合っています。

ここでも、大事にしていることは、教職大学院がそのカリキュラムの中で大切にしている傾聴と語り合いです。一方的な連絡や報告で終わるのではなく、お互いに語り合う場を大切にしてきました。

しかし、世界中を襲った新型コロナウイルス感染症の影響で令和元年度の第2回目の協議会（令和2年3月）は中止を余儀なくされ、年度が明けた令和2年度の5月も当初は、開催が危ぶまれました。学校は臨時休業中であり、緊急事態宣言下では語り合う協議会は最も感染リスクの高い形態と考えられました。そこで郵送による資料の案内による代替も想定をしました。スタッフによる何度もの検討の末、時期をずらしてでも、傾聴と語り合いを今こそ止めずに行う。

そのためのオンラインでの開催へと舵を切ることになりました。

2. 制約された中だからこそ見えるもの

（令和2年度第1回）

オンラインでの開催を決めたことで、慣れ親しんだ形から、これまでにない運営や各校との複数回にわたる接続テストなどの事前の準備に、試行錯誤しながらチャレンジしていくことになったのですが、このチャレンジが大きな発見をもたらしました。この10年の歩みの中で、その連携の絆を全国へと大きく拡大してきた本教職大学院ですが、拡大の結果として、これまで福井から距離が遠く参加することが叶わなかった学校、関係機関も多く生み出すことになっていました。今回、開催形式をオンラインにすることで、県外の先生方も物理的な距離を越えて参加することが可能になったのです。

令和2年6月30日に行われた令和2年度第1回の運営協議会への参加数は53名（スタッフを除く）、前年度の31名から大きく増加することとなりました。そこでは、少人数での語り合いの場であるグループ協議もオンライン上で行われ、距離という空間の制限を超えた傾聴と語り合いの環境も確保されました。コロナによる制限された環境が、これまで難しかった全国規模の語り合いの場を生み出しました。

3. 共有の必要性（令和2年度第2回）

令和2年度末の運営協議会は、昨年度、学校の臨時休業もあって開催を中止したため、2年ぶりの開催となりました。年度末の運営協議会ではこれまで1年間の各事業の報告を中心に行ってまいりましたが、令和2年度は、令和3年度から発足する総合教職開

発本部への動きを鑑みて、年間の振り返りに加えて、組織再編についてが議題となりました。

本教職大学院は、その10年余の歩みの中で、規模を大きく拡大してまいりました。そのことは、井戸端会議で情報を共有できた組織から発展し、県内各地に加えて奈良、岐阜、東京をはじめとした全国各県にコミュニティが分散する現状を生み出しました。その中で「理念や情報をいかに共有するか」、そこへの試行錯誤は、各地で自立するコミュニティをつなぐ、組織マネジメントの在り方への不断の挑戦でもあります。対面できない1年を終えるにあたって、いつも以上に関係者の皆様との理念の共有の必要性を感じる会となりました。

4. 令和3年度に向けて

年々拡大する組織や院生数、職員数に合わせて令和2年度も様々にモデルチェンジをしながら運営を進めてまいりました。運営協議会への参加者数も拡大し、参加範囲も全国化していく中で、より一層のビジョンの共有と情報共有が求められています。令和2年度は、共有のための道具として、ICTを利用することで、コロナ禍であっても、物理的距離を縮めることができました。令和3年度も、関係者の皆様のお声をいただきながら、更なる連携の在り方について模索してまいりたいと考えております。

5. 協議会でのご意見

昨年度参加された皆様からいただいたご意見のいくつかをご紹介します。

- ・（免許状更新講習について）Zoomでの実施については、対面式と同様の内容と質を担保できるのかが心配だったが、大学側と協議しながら進め、結果として全員がZoomでの研修に取り組むことができた。

- ・今年度院生が執筆した長期実践報告書が届いた。読んでいたところ、ある院生の報告書に、“卒業式である生徒に「自分は変わったと思う。それは先生が変わったからだ」と言われた”という印象的なエピソードが記載されていた。先生方にとっては非常に刺激的なことであったと思う。

- ・コロナ禍でいろんな事が例年通りにいかず、職員で話し合う機会が増えた。職員と施設長とのギャップもわかったことで、一緒に取り組めた。

- ・年間何度でも語り合う場があるともっと良い。3カ園だけでなく教職大学院のスタッフも入る機会があると良い。

運営協議会で頂いた貴重なご意見は、教職大学院で分析・検討を行い、今後の教職大学院運営や状況改善に活かしていきたいと考えています。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

（文責 宮下正史）

【参考資料】

- ・「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）」中央教育審議会（平成28年12月21日）

開 講 式

2021年4月3日（土）午後、今年度の連合教職大学院の出発となる、2021年度開講式が行われました。感染症への対応のためオンラインとオンサイト併用し、福井大学会場と岐阜、東京サテライト校、宮古島、各地から参加する院生をオンラインで繋いでの開催となりました。各地の連携校やサテライト校、全国からの入学生らが繋がっていることを実感する開講式でした。



今年度は、授業研究・教職専門性開発コースに14名、ミドルリーダー養成コースに15名、学校改革マネジメントコースに20名の計49名が入学しました。また、新たに多くのスタッフが加わりました。

開講式は福井大学文京キャンパスの大講義室をメイン会場として開催されました。

まず、柳澤研究科長から挨拶がありました。「昨年度はコロナの状況が続き、2年目の方も含めて、新しい出発の日になっている」との言葉は昨年度を経験した院生、スタッフともここに響きました。新しい大学入試、来年度からの新しい高校の教科書を取り上げて、「様々な意見、資料を検討しながら協働でそれを深め、自分たちの表現にし、共有していく、それを授業の中で実現していこうという方向性が見えていた」が、「それが実現するかどうかは先生たちの力にかかっている。（我々の世代は）学校でそうした学びをしてきているわけではないから、ある意味、子どもたち以上に難しいチャレンジを余儀なくされてい

る」しかも、こうした力は「今までのように講義や伝達講習では身につかない力」である。そこで、主体的で対話的で深い学びを実現し支える力をどう培っていくのかということについて、教職大学院ではいくつかの重要なポイントがあるとし、三つの軸で示されました。一つ目は「プロセスを探る」課題に対する追求プロセスをじっくり探っていく、どんな風に展開していくのかを学んでいくこと。二つ目は「自分たちで協働探究にチャレンジする」自分たちで協働探究にチャレンジし、いくつもの壁や試行錯誤を通してさらに吟味していく。その辛抱強いプロセスを自分たちでやっていくこと。三つ目は「お互いの試行錯誤のプロセスを照らし合いながら協働で考える」教職大学院のカンファレンスでは他のメンバーが苦労して進めている実践をじっくりフォローしていく、探っていく場面であり、同時に自分の試行錯誤を言葉にしていって、そこから吟味にしていって手がかりを得ていくことが同時に行われている。さらに協働で自分たちの実践を照らし返しながらさらに深めていくサイクルになっている。主体的で対話的で、深い学びを自分たち自身が実現していくことを通してその力を培っていく。最後に、「福井大学連合教職大学院は開かれた大きなコミュニティである。自分のコミュニティと教職大学院のコミュニティを往還しながら、学びを深めていきたい。今日、小さなセッションがあるが、それが出発点になる」と結ばれました。



その後、スタッフ自己紹介後、東京都サテライト校から木村先生がカリキュラムについて説明、続けて、福井大学会場のスタッフから年間計画や4月の合同カンファレンス、拠点校や連携校の担当教員、履修手続き等の説明がありました。恒例の記念撮影は残念ながら今年もできませんでした。いろいろハプニングも続出しましたが、進行の遠藤先生が「(本大学院の) 実際の状況の中で学ぶということでは、こういう大きな会場でハイブリッドで行事を行うと、

どういことがおきるのかということがより学べたのではないかと和やかに全体会を締めくくりました。

その後、学校別分科会は、福井大学、岐阜聖徳学園大学、東京サテライト校と会場毎に実施されました。福井大学会場では8教室に分散し、必要に応じてオンラインも活用し、1年目から3年目までのメンバーおよびスタッフが一緒に今年度の展望や連携について話し合いました。

1年目の皆さん、ご入学、おめでとうございます。これからどうぞよろしくお願いいたします。



Schedule

5/22 Sat. 5月合同カンファレンス A日程

5/29 Sat. 5月合同カンファレンス B日程

6/20i Sat. - 6/21 Sun. 実践研究福井ラウンドテーブル Summer Sessions 2021

※詳細は、決まり次第、ホームページにアップされます。ご覧ください。

【編集後記】ご入学おめでとうございます。昨年度は開講式が開催できませんでしたので、開講式の記事を掲載できることを嬉しく思いながら、本号を編集いたしました。常に状況は変化し、わたしたちは臨機応変さと、大切なことを見失わないことを求められています。Newsletterもメール配信に切り替えて発行を続けてきましたが、本号の巻頭言で、今一度、Newsletterの意義を共有し、確認することができました。ニューレターの背景と意義をみなさんと共有し、確認することができました。今年度もみなさまの原稿をお待ちしております。

教職大学院 Newsletter **No.146**
2021.4.24 内報版発行
2021.5.10 公開版発行
編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp

